



隔絶



せり～ぬ少納言

窓を開けると部屋には柔らかなそよ風と共に、新緑の樹木の青々とした匂いが流れ込んできた。女はそれらを両腕と鼻腔を広げて全身で呼吸した。そしてその一連の動作と感覚受容を、過去の同じ動作と感覚受容の記憶と照らし合わせて、やはりもう女にとって何の意味も成さないこと・何も喚起して来ないものだと確信した。つまりは、女自身にとって両腕を撫でるそよ風がもう柔らかくはないことを、鼻腔をくすぐる樹木の匂いが青々としていないことを再確認したのだ。

改めて女は、自分がいよいよ世界と隔絶されてしまったのだと感じた。観念して窓をそっと閉めた。

この隔絶は（お察しの通り）今突然に始まったものではなかった。自分でも見知らぬうちにそれは女の生活の奥深くにまで入り込んでいて、だんだんと膨張し、ついには女の身体の内部をも犯して痛みや苦しみといった負のもの以外の、ありとあらゆる知覚を徹底的に破壊した。どうしてそのような事態になってしまったのか、女には皆目見当も付かない。長い孤独のせいだろうか、それとも将来の見通しの立たなさや絶望のせいだろうか。どこでしくじってしまったのだろうか。「離人症」といった適当な言葉で専門家はこのことを片付けるだろう、さもあっさり。けれども女にはそのような精神病理学的知識などなく、仮にどこかでその言葉を見知ったとしても、あるいは直接説明を受けたとしても、やはり納得してそれ（隔絶、あるいは離人症）をやり過ごすことなど到底できなかつたであろう。

なぜなら女にとって、「感じ取れる」ということこそが女自身であるという証拠そのものだったから。CDコンポから流れる大好きな歌手の音楽、部屋の壁面に飾った思い出の写真の数々、手に取ったボールペンのグリップの感触、ティーカップに注いだ紅茶の香りや湯気の描く紋様、口の中に広がるチョコレートの甘味と微かな苦味、など等、女を取り囲むごく普通の事物から発生する「感じ」によって、女はこの地上で確かに生かされていた。存在を認められていた。裏を返せば、それを感じ取れなくなった今となつてはもう、女の存在を真っ向から否定されているのも同然だった。

ひどく腹部が痛んだ。トイレに駆け込めば例のごとく下痢であつた。そしてその後には決まって胃痛・胃重あるいは吐き気がやってくる。その繰り返し。しかも一日の内に何度も何度も。検査を受けても（その検査自体がまた苦痛であつたというだけで）何の器質的異常も見当たらない。こんな状態がいつ頃から続いているだろうか。便座に座りながら、大きく一息をつきながら、女は思った。どうか、どうか私をまた世界と同化させてほしい、と。だからどうか許してほしい、と。

手を洗って、トイレから出た女は再び部屋に戻ってパジャマからジーンズと黒い半袖のTシャツに着替えた。セミロングの髪を軽く櫛でとかしたが、鏡は見なかつた（鏡面に写ったニキビだらけの自分の醜い顔を見たくなかつたから）。そしてハンドバッグの中に鍵と、携帯電話と、身分証明書入りの財布が入っていることを確認してから、それを持って自宅を後にした。

それにしてもこの自宅（二階立てのアパート）から最寄り駅までの十分弱の道のりが、ここまで奇妙で不快だったことは未だかつてなかつた。玄関の鍵を閉めて振り返つた瞬間から、女の目の前に広がっていた光景は、有機・無機の関係なしに全て物質ではなく文字によって構成されて

いた。例えば、女はアパートの階段を下る（女はアパートの二階の、階段側の角部屋に住んでいた）。しかし女にとって、アパートの階段は最早「アパートの階段」というモノではなく、ただの音の羅列としての、意味を伴わない文字の塊だった。女は「あぼーとのかいだん」という文字の表面を下った。

女は「あすふあるとのほどう」（アスファルトの歩道）を進む。その片側には「くさばな」（草花）や「きぎ」（木々）や「のらねこ」（野良猫）といった生命があつて、もう片側には様々な型式の「じどうしゃ」（自動車）が「はいきがず」（排気ガス）を出しながら走っている。はるか頭上からは「くも」（雲）のたなびく「あおぞら」（青空）が俯瞰している。この、英字新聞を四方八方に貼りめぐらしたような風景の中を、女はただあの切実な思い（どうか私をまた世界と同化させてほしい）を抱えたままひたすら歩んだ。

そして、何とか「えき」（駅）に到着した。

その安堵感からだろうか（安堵という感覚がまだ少しでも自分の中に残っていたことに、女は驚きを覚えた）、英字新聞は所々破れ始めて、質感を伴わないにしても物質としての世界がまた少し覗き始めた。

エレベーターに乗り込む。女の他にも男女がそれぞれ一人ずつ、合計三人。上昇して、エレベーターの扉が開いて、三人は放出される。女は「はんどぼっぐ」（ハンドバッグ）からS U I C Aを取り出して改札へ向かう。「ひと、ひと、ひと、ひと」（人、人、人、人）。改札を通り抜ける。

ここまで来ると急に女の心臓は高鳴り始めた。と言っても、それはまるで女の耳元で聴診器越しに、誰か別の体の内部からドクドクと聞こえているようだった。期待の為だろうか、それとも怖気づいてしまったのだろうか。女は動悸の原因を探りつつ、今度はわざわざ階段でプラットホームへと向かった。手摺りたいに（紙風船を握っているような感じだった）一段一段下る度に（トランポリンを蹴っているような感じだった）、どこかから「あともうちょっと、ほんの少し」という声が聞こえてきてだんだんとそのヴォリュームも大きくなっていった。女は心の内でその声に対して頷き続けた。

プラットホーム。二番線と三番線の列車の到着時刻を確認すると、それはそれぞれの電光掲示板上で「十時三分」と「十時十一分」とになっていた。ただし三番線（十時十一分）の方はどこかで的人身事故の影響で遅れが生じている旨であった。「人身事故」の文字が初めて確かな意味合いと質感と量感をもって女の身体を貫いた。女はその痛みに思わずフラついたが、「だとすれば、二番線だ」との例の階段のところから続く声の誘導に従ってその方に片足を着いた為、転ばずに済んだ。

女は手元の携帯の時計を確認した。九時五十七分。すなわち、運命の時刻まであと六分。

女は深呼吸した。そして「れっしゃ」（列車）の入って来る方向を確かめると、なるべくそちらへ近づけるようにとプラットホーム上を急いで移動した。その間、女の頭の中で行われていたことは、何人もの女自身の可能性がプラットホームから線路へと飛び降りていく、という所謂イメージトレーニングだった。彼女らはめでたく「れっしゃ」（列車）に轢かれて粉々の「にく

へん」(肉片)と化していった。「やれるよ、大丈夫」とあの声があった。女自身もそう思った。それとほぼ同時に、適宜であろう場所(プラットホームの端から一、二両分くらいであり、尚且つ列車の扉が開く定位置に相当しないところ。人の並んでいないところ)にも辿り着いた。十時きっかり。女は待った。「きいろいせん」(黄色い線)の内側すれすれで、身を乗り出して待った。

そうしているうちに、

「まもなく……にばんせんに……が、とうちやく……。あぶないですから……さがって……」

と、かつて何百回(あるいはひよっとすると何千回)と聞いた例のメロディーとアナウンスが流れてきた。しかし勿論その内容が女の頭に入っていくことはない。女にとってそれは死への、あるいは待望の世界との同化への合図。運動会での「よういどん」の「ようい」の部分に相当した。女は一等賞を狙う子供よろしく「きいろいせん」(黄色い線)の真上に踏み出た。

ところがその瞬間に、世界が全て現実味を取り戻した! 「きいろいせん」が一気に足元で黄色い線へと変化し、その丸い凹凸までがはっきりと足裏に伝わってきた! 心臓もこれ以上ないくらい速くまた力強く、今度は確かに女自身の身体の内でも鼓動していた!

「さあ、迎えに来てあげたよ!」とあの声が嬉々として言った。女はひどく動揺した。過去のあらゆる記憶が五感を伴って全身を駆け抜けていく。右手の方に列車の姿が小さく見え始めた。それはどんなに小さくとも「れっしや」ではなく確かな現実感をもった列車であった。

日の光を受けて銀色に輝く車体がどンドンと近づいて来る。大きくなっていく。そして、「来い!」

あの声がそう叫んだ時、女ははっきりと心の内でダメ! と叫び返していた。怖い、死にたくない、生きていたいと、初めて自覚した。あるいはこれまでになく強くそう思った。

女の目の前を列車の最前部が通り過ぎていく。それにいくつかの車両が続いて、あるところで停止し、いくらかの人々を放出してまたいくらかの人々を取り込んで、その全ての扉を閉める。

それはまるで世界からの絶縁状のようであった。扉があの特徴の音を立てて閉まった瞬間、その音に紛れてあの声(今思えば世界の声だったのだ)が捨て台詞のように言い放ったのを女は聞き逃さなかった。

「なんだあ、せっかく来てやったのに」

途端に英字新聞がばら撒かれていった。ものすごい勢いで周囲や自分や、ひいてはそれらの状態にまで容赦なく貼り付けられていった。女に「きびすをかえす」(踵を返す)ように「しゃたい」(車体)は「うごきだし」(動き出し)、「じょじょ」(徐々に)「そくどをあげ」(速度を上げ)ながら、「ぷらっとほ一む」(プラットホーム)から「かんぜん」(完全)に「はなれていっ」(離れて行っ)てしまう。「みえなくなっ」(見えなくなっ)てしまう。

「ひと」(人)もまばらになった「ぷらっとほ一むじょう」(プラットホーム上)で、女はただひとり「ぼうぜん」(呆然)と「たちつくし」(立ち尽くし)たまま、「おおつぶのなみだ」(大粒の涙)を「ながし」(流し)ていた。